

咬合の指揮者である犬歯と臼歯部の要である大臼歯について

(1日目：講演、2日目：実習)

咬合の再構築には咀嚼器官の役割とは何か、さらに生体に調和した補綴装置とは何かを考えて再構築を行うことが重要である。また咬合再構築の際の上下顎関係はアングルⅠ級正常咬合(1歯対2歯)の獲得を目指し前歯部は下顎運動に調和したガイダンスまた臼歯部には咬頭嵌合時の咬合圧および下顎位維持のためのコンタクトの位置を確立する事であり、全歯列の咬合様式の基本としてのミューチュアリー・プロテクション(相互保護)を構築することではありますが、しかしながら臨床においては正常咬合であるアングルⅠ級咬合(1歯対2歯)ばかりではなく、下顎後退咬合のアングルⅡ級咬合(1歯対1歯)や下顎前方咬合のⅢ級咬合また、犬歯の歯軸方向や近遠心的な上下顎の位置の違いなどの影響で、犬歯誘導の形態の獲得が困難になるケースがある、さらに臼歯部においては咀嚼や強いパラファンクション(ブラキシズム)などによりエナメル質が咬耗し犬歯主導から第一小臼歯へとグループガイダンスへさらにバランスドガイダンスへと咬耗が移行してきて臼歯部の離開量が確保出来ないケースも多いと考える。そこで今回は正常咬合の犬歯誘導や臼歯部離開について再確認をしていただき、実習でのアングルⅠ級咬合(1歯対2歯)の模型をとおして咬合の要の犬歯ならび大臼歯の重要性を考えてみたいと思います。